
転生したと思ったらペルソナ

はいんちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生したと思ったらペルソナ

【Nコード】

N0597Z

【作者名】

はいんちゃん

【あらすじ】

転生したけど神様はいなかった。

許さんぞ神イイ!!
(前書き)

俺は本当に駄目な奴だ

許さんぞ神イイ!!

「はっ!!」

何度この身の丈ほどの大剣をふるっただろうか。

斬るのではなく叩きつぶす。そんな剣技も何もない不粋な剣。人ではない何かを打倒する為の剣。

剣を振るうごとに消滅していく化物。

この剣は目の前の化物を殺す為だけに作ったものだ。

この体は目の前の化物を殺す為だけに造られたものだ。

「温い温い温い!! さっき入った風呂よりぬるぬるだっつーの!!」

ただ力任せに振り回すと、重量と勢いも相まってヘドロのような化物の身体は容易く二つに開かれた。

生ぬるい液体が飛び散り、頬に触れる。頬を拭くと袖が真っ黒に染まる……後で洗濯しよう。

すると化物からの反撃。

俺はそれを避け、受け流し、防御する。

一歩間違えば致命傷を負うかもしれない。

だからと言って、一歩も退く気は無い。

死に近い感覚。非日常なう。

そんな興奮が、アドレナリンが脳内を支配する。

より死に近づくからこそ感じられる生。

俺が軽くハイになる傍らで化物が呻いたのか叫んだのか、不協和音が辺りに広がる。

先程よりも数が増えているのは多分気のせいじゃない。

「はは」

「は は は は は は は は は は !!」

それと同時に堰を切ったように俺も笑う。嗤う。

「もつとだ」

嗚呼、楽しい。

「もっと俺を楽しませろよ化物オオ!!!」

大剣を投げつけ、懷から二丁の拳銃を取り出して周りに居る化物共を撃ち抜いた。

「Let's Rock Baby!」

イカれたパーティの始まりだ、
ってか？

•

•

•

死は人間であれば誰しもが1度は経験するものである。貧者だろうが富豪だろうが、男だろうが女だろうが、老いも若きも平等に迎えるはずだ。

しかし、それは人生に於いて1度きりしか存在しない。

だからだろうか、死に触れてみたいと思ってしまうのは。

別に死にたいわけではない。

だが死に近い体験をしてみたい。
死と言う非日常に触れてみたい。

本気で思わなくとも、心の片隅にひっそりと抱えている思い。
死んだ後、自分はどのようなのだろうかと言うちょっとした興味。

……とまあ、それっぽいことをグダグダと言ってみただけ。

とりあえず、俺は1度死んだ。

……嘘じゃない、だから石を投げないでください。

先述したとおり、死は人間であれば誰しもが「1度は」経験するものだ。

これを経験する前は、「誰しもが必ず経験するものだ」と思っていたのだが。

俺の最初の「最期」はなんのこっちゃない、交通事故。

そして目を覚ましたら、真っ白な部屋……病室だった。
最初は助かった？と思ったのだがどうにもおかしい。

俺の手足が短くてそれに動揺していた所、見知らぬおねーさんが俺を抱き上げたのだ。

それを見て瞬時に「成程な」と思った。

俺は所謂転生を体験した、と言う事だ。

つつても神様にも会ってないし便利なチートだってもらっちゃいない。

便利な主人公補正だってないから母さんと思っていた人もあっさり病死。

父さんと思っていた人も、愛する者の死に耐えきれなかったのかあっさり俺を捨ててどこかへ蒸発した。

そんな軽く壮絶な人生の先にたどりついたのが、とある研究所。

どうやら捨て子を集めて人体実験を行っているらしい。

——ペルソナの人工的開発。

なんか俺は幸か不幸かペルソナの適正が合った。

だからだろうか、シャドウに対抗する『身体』造りをする事になったのは。

3食流動体の何かだったし訓練以外は無色透明な薬品を打ちこまれる日々だったり。

酷い時は体を削って（物理的に）何かを埋め込まれたり。

他の面々も大して変わらないような事をされていたようだが。

ていうか普通人体実験なんてばれたらヤバイし、中にはその事実を世に広めることでそれを止めようとする人も居るだろう。

……そう思っていたのだが、相変わらず実験の日々。
バックについていた桐条グループが何もかもを握りつぶしていたようだ。

どうやらお偉いさんがこのペルソナとシャドウと言う物に魅せられたらしい。

ははぁん。

転生した理由は分からないが、神と言う物が居たのならあれか。
俺に恨みでもあるんだろうな。

でも俺からしたらそんなこと知ったこっちゃないし、もし仮に会う事があればどんな神でもぶん殴ってやろう。

……嗚呼、愛しい程に憎い神様仏様。いつかこの手で引き裂いてやる。

そんな幻想に近い妄想を糧になんとかここまで生きてきた。

中には拷問のような実験を経て精神に異常をきたしたり、純粹に薬品に対する拒絶反応で肉体的に死んだりする奴も居る中で、それでも俺は何とか生き残る事が出来た。ひょっとしたら主人公補正かもしれない、なんてな。

心は耐えきっても肉体的に死んだら意味無いもんな。まあ薬のせいか髪の毛が黒からくすんだ銀色みたいな鉛色みたいな感じに変色しちゃったけど。

そうまでして得た力と、失ったモノ。

——戦い無しにはいられない。

なんつーか、ちよつとした戦闘中毒者になっちゃった。バトルジャンキー

実験サンプルを取る為に何度もシャドウと戦ったその名残だろう。

そして俺をこんな体にくれた研究所……桐条グループはとある実験でミスって何もかもを御破算にしてくれた。

あの時『滅びの断片』を目の当たりにした俺だったが、なんとか生き残れたからよしとしようか。

閑話休題。

タルタロス行こうと思っていたが、珍しく街中にシャドウが大量発生したからタルタロスにはいなかった。

それと関係あるのか知らないが、今夜は満月だ。こいつらが居なけりゃ風情ある夜を過ごせただろうに。

「ハア……シャドウを感知できるペルソナだったらなー」

そこんところは不便である。実に不便だ。

いつシャドウが襲いかかってくるかわからないし。

基本的にはシャドウの動きは緩慢なので割と物音で気付けるが。

とか思ってたらほら、物音が……。

「……人間？」

なんかデカイシャドウに追われている人間が居た。

しかしその顔は見知らぬ顔で、多分人工ペルソナ使いではなく、
たまたま迷い込んだかもしれない『天然』の方だろう。

見た感じ鍛えているように見えるから……恐らく後者だろうか。

「シャドウ相手に不覚とってケツまくって逃げてるってどこか」

助けるのはやぶさかではないが。

「正直めんどくさい」

存分に戦ったし日々のストレスはもう「抜いた」。

世の為人の為なんて俺の柄じゃねーし。

「でもまあ……ちょっとつけてみようか」

研究者達が人工って言っていた辺り天然も居るんだろうなと思っ
てはいたのだが、天然モノは初めてだ。

……いや、タルタロスでそれっぽい奴を見かけた事はあるのだが、
あの迷宮だ。ちょっと目を離れた隙に見つけられなくなるから困る。
すると後ろからもシャドウっぽい物音が聞こえてきたのだが、今
現在俺の中での重要度は天然ペルソナ使い（仮称）＞シャドウって
事なのでそのシャドウからはさっさと逃げて相手せずに尾行を開始
することにした。

・・・

「はあ、はあ……」

真田明彦は自身を襲った大型シャドウに戦慄しながらも、喜びを
あらわにしていた。

今まで見た中でも一位二位に行く程の強敵。しかし不覚にも不意打ちを受けた事で肋骨が何本か折れてしまったらしく、真田は泣く泣く逃走を已む無くしていた。

気を抜いてしまった戒めだたと真田は自嘲しながらも、兎に角美鶴達に知らせねばと考え無線で作戦室に連絡を試みたところ、すぐに反応が返ってきた。

『こちら、作戦室だ』

『俺だ!』

『……明彦か? どうした?』

『凄い奴を見つけた! これまで、見たことも無い奴だ!』

……ただ、生憎追われていてな。もうすぐそちに着くから、一応知らせておく』

返答を待たずに無線を切った。これ以上声を張る余裕も真田には無いらしい。

一人で撒けるのならそうしたかったがこの怪我では無理そうだ。

(……情けないな。一人で影時間の中うろついた揚句、強敵を連れて逃げ帰るとは)

二度とこのようなミスはしないと誓いながら、真田は夜の街を駆ける。

・・・

着かず離れずでシャドウにもペルソナ使いにもばれずに尾行する

ことに成功した。

あのデカイシャドウはそこまで頭が良くないらしい。ペルソナ使いは逃げる事で精いっぱいだったみたいだな。

すると学生寮か何かにペルソナ使いは駆け込み、シャドウは壁伝いに上によじ登って行った。

「はぁはん」

どうしようかな。

「うーん……登れない事も無いが……」

ペルソナ使いはどうも意図的にあの建物に逃げ込んだようだし、なにか策の一つでもあるのだろう。

はてさて……どうしたもの……か……!?

「!?!」

何だ……!?!? この感覚は!?!?

感知能力の無い俺にすらひしひしと伝わる。

言うなれば『死神』の力。10年前にも一度体験したあの感覚。

瞬間、俺は反射的に足に力を込め跳躍していた。

「はっはア! 神様ってのは存在するもんだなア!!」

建物の中腹に差しかったところで窓の縁を掴み、腕の力だけで更に宙を舞う。

待ってろ愛しい死神様。死を司る神に死を教えてやる。

それとも、死神は俺に二度目の死を教えてくれるのか？

そして辿り着いた屋上。しかしそこには俺の思っていた死神は存在しなかった。

真っ白なペルソナ。背に豎琴のようなものを背負っている。

そして大型シャドウは跡形も無く消え失せており、地上で感じた死神の力も感じられなくなっていた。

「……だ、誰？」

なんかカーディガンを着た女の子がこっちを見ている。

後先程見たペルソナ使い（仮称）とは別の男がペルソナを召喚している。

成程な、この建物は天然ペルソナ使いのすくつ（なぜかへんかんできない）か！

そんで何？ 雑魚が二匹？ 大型シャドウもいなければ死神も居ない。何だこれは、馬鹿にしてんのか？

「んだよ面白そうだから着いてきたってのによお……なーんなんですかこれエエエ！！？」

こうなったら八つ当たりだ。二体のシャドウを一薙ぎに切り裂く。憐れあっけなく二つに分裂したシャドウ達はあっさりと消滅するのだった。

「またつまらぬ物を斬ってしまった……」

「え、えーつと……」

満足げに頷く俺。

状況が飲み込めていない女の子。

ペルソナを消した後意識も失ったらしくその場に倒れ込んだ少年。

……何だ、この状況？

・・・

「何だあいつは……」

「それは有里に言っているのか？それとも外壁から上ってきたと思われる男に言っているのか？」

「両方だ！」

ある一室。

大量の機材が忙しく稼働している中、その中央にあるモニターを見て真田明彦は驚愕した。

何せ自身に重傷を負わせた大型シャドウを、初めてペルソナを召喚したと思われる少年があっさりと撃破したのだから。

更に、学生寮の外壁から突如として現れた男の方は身の丈ほどある大剣を軽く一閃させただけで2体のシャドウを撃破した。

次から次へと変動していく状況に、モニターを見ていた真田はもちろん、その真田に問いを投げかけた桐条美鶴も驚きをあらわにしたり、その場に同伴していた幾月修司も愕然としていた。

「兎に角、屋上へ行くぞ！！」

有里と呼ばれた少年……先程ペルソナを召喚していた少年が倒れた。

恐らく初めて召喚したことによる負荷からだろう。

今すぐ屋上へ行って彼を病院へ連れて行かねばなるまいと、真田と桐条はすぐさま屋上へと急行するのだった。

...

「起きて！起きてったらー！！」

凄い勢いで少年をゆすっている。あ、脅しているとかじゃなくて物理的にな。

むしろそこまで激しく揺さぶると体に毒なんじゃないかな？ここは動かさない方が……。

「あのー、何だ？御愁傷さま？」

「もう、そんな事言ってる場合じゃないでしょ！誰だか知らないけど、救急車とか呼んでよ！」

「おーけー落ち着こうか、今は影時間なうだ、そんな事は無理だ」

「でもこのままじゃ有里君は！」

何だこいつ、初対面のくせに遠慮知らずだな。

でも多分これはペルソナを覚醒させた事による副作用みたいなものだろう。

いつ起きるか知らんが死ぬ事はないさ。うん。

「ホント!?!」

「ホントホント、ボクウソツカナイアル」

とか何とかのんきな言葉の応酬をしていたら、さっき俺が尾行していた短髪のスポーツマンな人がバタバタとやってきた。

「無事か!？」

その言葉を言うならシャドウが居た時にここに来るべきだったと思うんだけど、部外者だから何も言わない事にする。

「影時間が明けた後、すぐに病院に連れて行きましょう!」

「大丈夫だ、医者はすぐに手配する」

スポーツマンに続いてクールビューティーな女性が。
何だ何だ、話についていけないってばよ。

そんな訳で俺はそそくさと退散しようとしたのだが。

「待ってくれ、少し話をしていかないか？」

そのクールビューティーな女性が話しかけてきた。

しまったなあ、興味本位で着いてきたらこれだもんなあ。

なんか面倒くさそうだ。間違いなく面倒だ。

「僕はジロー・タナカ! もちろん偽名です! 趣味はストーキングです! もちろん嘘です! 今日黒い化物に追われていた短髪のおにーちゃんを興味本位でおっかけてたらこんな所にやってきました! これはホント!」

特技は気配を絶つこと！これはデマです！好きな物はリンゴ！嘘じゃないよ！嫌いな物は梨！ホントだよ！さあて問題です、僕は嘘を何回ついたでしょうか！！文脈自体は全て事実ですので深読みしないでいいですよ！おっと良い子はもう寝る時間だからおやすみなさい！！」

「ちょっと待……！」

アーアー、キコエナァーイ。

俺は有無を言わず屋上から飛び降りた。

「「!？」」

何か聞こえた気がしたが、知らん！

・・・

「……何だったんだ」

「……変わった人でしたね」

こちらの事情を話す前に逃げられてしまった。

真田明彦は新たな戦力を取り逃がしてしまった事に後悔し、岳羽ゆかりは茫然としている。

その一方で、桐条美鶴は何やら思案顔をしていた。

「なあ、明彦。さっき黒い化物に追われていた短髪の男を追いかけていたと言っていたよな？まさか明彦の事か……？」

「……全く気付かなかった。」

いくら俺が怪我をして逃げるのに手一杯だったからと言って周囲にも気を配っていたのは事実だぞ」

「それをかいくぐった上に、あの様子を見る限りでは普通のシャドウは歯牙にもかけないと言った様子だ。」

……あの男、かなり強いな」

「あ、そう言えば影時間に関しても知ってる風でしたよ」

意識の無い少年、有里湊を介抱しながら岳羽が真田と桐条の会話に混ざる。

突然倒れた有里に慌てながらも、先程の大剣を持った男との会話をしっかりと把握していたようだ。

「……本当か？」

「はい」

桐条は岳羽の言葉に再度問いかける。

自分たち以外にも影時間の事を知っている人間がいたとは思わなかった、といった表情だ。

確かに、影時間もシャドウも、ましてやペルソナ使いを知る者は滅多に居ない。

しかし、あの反応を見る限りでは厄介事は御免被ると言った様子だろうか。

だが屋上から飛び降りると言うのも人間技とは思えない。

となるとやはりあの男もペルソナを扱える存在だと考えても差支

えないだろう。あの場では使っていなかったが。

「……出来れば、あの彼も仲間に引き入れたいところだな」

桐条の言葉に岳羽は少し眉をひそめながら口を開いた。

「あの、彼「も」って言う表現は有里君も仲間に引き入れるって事ですか？」

「……出来れば、な」

「そう、ですか」

先程の戦いを見ればわかるが、遊びではなく命がかかる。

そのような戦いにホイホイとペルソナに適正があるとはいえ一般人を引き入れようと言うのは如何なものか。

「人の為」という大義名分があるとはいえ、岳羽は桐条の強引さをどこか不審に思っていた。

・・・

「ハア、なんだか面倒な事になりそうだ……あ、腹減った」

我が根城たるやつすいボロアパートへと帰還した俺は、大剣と2丁の拳銃を床に置きベッドへダイブした。

飯は……後でコンビニ行こう。

「天然のペルソナ使い……か……」

探した事も無かったしそもそも考えた事も無かった。

研究者達が自身の作品を誇るように人工のペルソナ使いと連呼していたから薄々天然も居る気がしていた、と言うのはさっき述べた通りなのだが。

居たところでそれがどうしたという話だし、はっきり言ってどうでもよかったつもりだったんだがなあ……。

しかしいざ目の前にそれが現れるとついつい着いて行っちゃまった。

「つーか今日は変な日だったな」

ペルソナ使いに大型シャドウに、そして何より一瞬感じた死神の力。

「ありゃ一体何だったんだろ」

思い出されるは、10年前。

火の海に沈む研究所と、それを背景に橋の上で対峙した俺と死神。

俺はあの時、完膚なきまでに敗北を喫した。

後は止めを刺されるのを待つのみとなったはずなのだが、それを救ったのが一体の対シャドウ用兵器。

力尽き薄れゆく意識の傍らで、最後に視界にとらえたのは当時の俺と同年代位に見えた少年だった。

そして目を覚ますとまた白い部屋で。

今度は転生をしたわけではなく単に生き永らえただけ。

あのとき感じた力を思い出すと、自然と当時の状況が想起されてなんかムカつく。

「まあ何だ、多分あいつらとはまた絡む事になるんだろうし、あいつらの近くにいたら何かわかるかも」

まどろむ意識の中で、飯食ってないと言う事実を思い出すものの睡眠欲に抵抗出来ずにそのまま身を任せる事にするのだった。

許さんぞ神イイ!! (後書き)

ちゃんと完結も出来ないのに次から次へと俺はいつたい何をしているのだろうか

D M Cのダンテさんのセリフ借りました。武器とかも似たような装備だけど武器に名前は無いです

存外に良い人だった（前書き）

とりあえず書きためていた分だけ投下。

存外に良い人だった

・・・

翌朝。

俺は学生鞆を取り出して自身の所属する高校……月光館学園へと向かうモノレールに乗っていた。

正直タルタロスに落ちてるお金をねこばすることで生活も出来るので（影時間が無くなる日が来ると思うとゾツとする）学校に通う気はあまりなかったのだが、よくよく考えるとタルタロスはここ月光館学園から出来ている。

となるとこの学生になっておいた方が深夜このあたりをうろついていたって怪しまれにくいだろう。いや、怪しいは怪しいが未だマシってレベルだろうか。ついでに補導されるかもしれないけど。

（今更だが、月光館学園って桐条グループが創設したんだよね……）

よくよく考えると、俺をこんなのにしてくれた奴らが作った学校に通っていると言う事か。

（それに、昨日のペルソナ使い……）

どうにも気になる。

ペルソナ使いと言えば桐条と言う方程式が俺の中で出来てしまっている為、あいつらも桐条にかかわっている気がしてならない。

そしてあれが学生寮だと言う事を考えると……。

（ヤバいな、髪の毛黒く染めてきた方が良かった）

全然気にしてなかった。ここは桐条の手の中なのに。

いや、まああの研究所の連中はまとめてくたばったらいいし多分敵と言うわけでもないんだが、桐条が俺を連れ戻そうとするのなら敵対関係になる事も辞さない。

でも正直めんどくさい。

（あ、でも学生証とかの証明写真も今のまんまだしあれだな、抵抗は無意味だな）

ここに入学する際、偽の経歴を提出したのだがその時の証明写真も今の髪の毛のまんまで通ったからな。校則が緩いのはありがたい。

あれこれと思考しているうちにいつの間にか駅に到着したようだ。

……無駄な抵抗をするのも面倒なので、素直に学校へと足向け
るのだった。

・・・

ここは1-A。俺の所属するクラスである。

飯も食ったし（授業中に）ボーっとしていたのだが、何やら上級生が……見知ったクールビューティーがずかずかと教室に入ってきた。

……やっぱり来た、とは思ったのだが。

「昼休みに失礼する。君が里峰竜児君か？」

「イイエ、僕はタロー・タナカ」

「おや、ジロー・タナカではなかったのか？」

「ニーサンを知ってるのですか？ 実は十年前から行方をくらませているんです」

「ほほう、君に兄弟はいないと経歴には書いてあったのだが……」

（詰んだ！）

いくらなんでも早すぎる。

そのうちここに来ると思っていたのだが、今日の昼休みに来るとは思わなかった。

それに経歴？ そんなのがわかるのはそれこそ桐条の手の者じゃねーと……ってそれこそ桐条の手の者ってことだろ。

「その経歴は敵を欺くための物なんです」

「ほう、入学する為の経歴を詐称するとはな……詳しく話を聞こう、屋上へ行こうか」

「あばばば」

俺の返答を待たずして俺の首根っこを掴み無理やり引っ張るクルビューティー。

閉まりゆくクラスの扉から聞こえてくるのは「何だあいつ美人からの御誘いか？」とか「うらやまけしからん」とかいう怨嗟の声だった。

そしてやって来ました屋上。男女が屋上というシチュだけ見ればリア充になった気分である。

「それで、話ってなんですか？心に決めた人がいるので告白はお断りですよ」

「ふふ、白々しいな……昨日の事についてだ」

やっぱりか……流石に昨日の行動は軽率すぎたな。
まあ別に隠すような事でもないしいいか。

「それよりも俺はあんたの名前を知りたいんだが？一方的に俺の名前ばっか知られてるのは癪だ。

一応自己紹介しておくが、月光館学園1年の里峰竜児だ」

「おっと、そういえばそうだったな……失礼した、私は桐条美鶴。
今度の生徒会選挙に生徒会長として出馬するつもりだ、よろしく頼む」

桐条……美鶴……？ってまさかとは思うが……。

「……桐条、鴻悦の……孫？」

「ッ……祖父を、知っているのか……？」

跡取りは確かに必要だもんな、て事はあのジジイの孫なのだろう。
やっぱり桐条の手の者……と言うか本人だった。

とはいえこいつは桐条鴻悦ではない。

敵対するか中立の立場をとるかはこのいつの態度次第。

しかし桐条鴻悦の孫とは予想以上の大物だった。
そしてそれが天然のペルソナ使い（多分）とは何の因果だろうか。

話をまとめるのは後でも出来る。そう言う事で桐条の質問に答える事にしよう。

「そうだな、ある意味では俺の親になるのかもしれない。
俺をこんな体にくれた親って意味ではな」

「!？」

……どういうことだ？ 良ければ話を聞かせてほしい」

「何のこっちゃない、対シャドウ向けの兵器として俺の体は隅々までいじくられただけの事よ」

元々ペルソナに対する適正があつた俺がなにをされたかと言うと、人体改造とでも言えはいいのだろうか。

御託を並べても仕方ないので一言で言えば人間兵器になったってことだな。

「ッ……!」

俺の言葉に息をのむ桐条。多分桐条鴻悦のしてきた事の全容を把握しきれていないのだろう。

あの実験は火の海に沈んだのだから、あの時の事に関する資料のサルベージは難航するはずだ。

となると当然桐条の知らない事柄等山ほどあるに違いないのだからそれは仕方のない事だ。

「いや、まあそんな事はどうだっていいさ」

「どうだって良いって……君は私を恨まないのか!？」

「お前を恨んでどうする？ お前を殺していい、とお前が許可してくれるのか？」

「それは……済まないが、私は私の祖父がしでかした事の償いをしなければならぬ。

そのすべてを片づける事が出来たのなら……私は君に全てを委ねよう、それでは駄目か……？」

何だそれ、愛の告白みたいだな。

いや別に桐条美鶴に関してはどうだっていいし、桐条鴻悦の事も別にどうだっていい。

聖人君子と言うわけではないが別に俺は桐条の事など恨んではないのだから。別について言いすぎだろ俺。

「だから言っただろ？ 別にお前の事を恨んじやない」

「……どうして、そのような事が言えるんだ？」

「どうしてって言われても……（なんでこの人のリボンこんなでかいんだろう）」

正直めんどくさい。

俺の思考はどんどん逸れる中で桐条は勝手に自己嫌悪に陥っている。

……昼休みももうすぐ終わりそうなので適当に切り上げる事にしようか。

「恨もうが恨むまいが俺の自由だろ。俺はもう自由なんだ、自主性を重んじる月光館学園的に考えたら桐条を恨まないと言う俺の選択

を尊重してもらいたいね」

じゃあの、と俺は軽く手を振りながら屋上から去る。

桐条美鶴は、最後までうつむいたままだった。

時は少し飛んで放課後。

クラスメイト達の恨みのこもった視線を無視しつついったん部屋に帰る事にする。

……つとその前に購買行ってくるか。カツサンド余ってたら買おう。

ここの購買は昼休みに売れ残った食べ物割引になったりするから部活生達に人気である。

その恩恵に俺もあずかろうと言う事で購買でパンを何個か買おうと思ったのだが。

「あ、あなたは……」

「あん？……何だお前か」

そこには俺と目的を同じくして購買に居たのだと思われる、昨日出くわしたカーディガンを纏った女の子がいた。

と言っても俺とその女の子の接点と言えばそれくらいしかないわけで、俺からしたら「挨拶すべきか否か迷う」程度の間柄でしかない。

それ故に簡単な反応を返したと言う事で俺の興味は購買で販売されている物品へと移って行った。

「ちょっと、それだけ！？反応薄すぎでしょ！こっちは同じ学校の生徒って事で吃驚してるんだから！」

「あ？あーまあ落ち着け、話なんざどこでも出来るだろ？俺はそこで売れ残ってるカツサンドを買いにき……」

何と、そのカツサンドが眼の前で別の生徒に売買されてバイバイしてしまった……。

「……おばちゃん、メロンパン2つ下さい」

「はいよー」

とりあえずさっさとパンを買う事にした。

「……何か、ごめんね」

「いや、いいさ。ホントにカツサンド食べたいなら昼休みに購買行くし。」

それよりも、コーヒーと紅茶どっちが好き？」

「え？どっちかって言うとな紅茶だけど」

「へー、俺はコーヒー派だなあ。ほら、ポロニアモールにあるシヤガールのコーヒーとかめちゃうくちや美味いんだぜ？1回しか行った事無いケド……。」

あ、おばちゃんコーヒーと紅茶も一個ずつくれ」

「コーヒーと紅茶ね、毎度ありー」

小銭をおばちゃんに渡してコーヒーと紅茶を受け取ると、紅茶とメロンパンをその女の子に渡す。

「へ？ いいの？」

「あ？ お前も何か食べ物買いに来たクチなんじゃねーのか？」

「ええっと、消しゴム無くなりそうだったから買いに来ただけど、丁度あなたが来たからそっちに目がいつちゃってたんだ」

「あらら、俺の勘違いかよ。まあ腹減ってねえなら他の奴にくれてやっても良いから、じゃあの」

何にせよ俺は今からこのメロンパンを食わなければならない。
さりげなく話を切り上げてしれっとこの場を立ち去るのだが、どうやらその事に気づかれてしまった。

「あ！ いやいやそうじゃなくて、どっか静かな場所行かない？ ちょっと話がしたいんだけど」

「仕方ないなあ……モテる男はつらいぜ」

「はいはい、馬鹿言ってるんで着いてきなさいよ」

十中八九と言うか十中十（造語）と言うか百発百中で昨日に関しての事なんだろうな。

逃げて同じ学校の生徒なのでやっぱり面倒は避けられない。
そういうことで素直に着いて行くことにした。

……はい、また屋上です。

とりあえず屋上の手すりを背もたれにして座ることにした。
メロンパンは売れ残りとは思えないほどの味で、周囲はサクサク

で中はしつとりと言う素晴らしい食感だ。

購買のパンのレベルの高さに舌鼓を打ちながら女の子が口を開くのを待つ。

「そう言えば、昨日は助けてくれてありがとね。私は岳羽ゆかり、よろしくね」

「気にすんな。俺がいなくてもあの少年がなんとかしただろうよ。俺は里峰竜児、今後ともヨロシク。

ああそうだ、少年は無事か？」

「ええ、お陰さまで……てか、あなた少年って言ってるけど、有里君はあなたの先輩にあたるんだからもうちょっと良い表現出来ないの？制服の刺繍見る限りじゃあなた1年生でしょ？」

「じゃ次からは有里先輩って言うよ。岳羽先輩？」

「う……付き合い長いわけじゃないけど、何かあなたが先輩って言うのは違和感」

「なんて我がままな女だ！これだから女って生き物は！」

「ちょ、ちょっと！私の反応だけで女性を一括りにしないでよね！」

メロンパンをもさもさと食べながら岳羽ゆかりは憤慨した。

てーか何か話あるんじゃないのか？いや、俺が話そらすのが悪いんだけどな……。

武器の手入れもしたいから、さっさと会話を終わらせて帰りたいところだ。

「まーいいや。なあ、何の用？昨日の事か？

それなら桐条美鶴が概ね把握して思うからそっちに聞いてほしいんだが」

「……やっぱり、あの人あなたと接触したんだ。なんて言ってた？」

「いや、何も？ちよつとした世間話」

「そうなんだ……」

一般人には中々ヘビーな過去話をした、なんて事を説明するのもあれだから適当にお茶を濁す事にする。

そういえば岳羽って性……どっかで聞いたような……。

俺と関係がある性は大抵が研究者だ。誰だっけか……あ、思い出した。

岳羽詠一朗だ。シャドウ研究の主任かなんかの。

俺自身被験者という立場だったからホイホイと話しかけられる相手でもなかったからあんまり覚えてないけど、ちよつとだけ話した事があるから思い出せた。

桐条美鶴の件もあるし、まさかとは思うがこいつも岳羽詠一朗の娘か何かなのだろうか。まあいいや。

「話ってそれだけか？」

「うん、まあね。ごめんね、これだけの事なのに紅茶とかおごってもらっちゃって。」

後最後に桐条先輩あなたを仲間に勧誘したいみたいな事言ってたんだけど、それに関しては何か言ってた？」

「あん？なんだそりゃ初耳だぞ」

まあ俺の事について責任感じてた風だし、そんな事頼めるはずもないか。

あの人が何か言う前に俺がその根底を覆してしまった感があるしな。

「あれ？そうなんだ、それなら良いんだけど……もし桐条先輩が勧誘してきても、嫌なら嫌って言うてくれていいからね？」

「お前だって戦力が増える事に越した事は無いんじゃないのか？まあそうなたら断るけどさ、面倒だし」

「そんな理由で断るの！？」

……確かにあなた強いから仲間になってくれたら心強いけど……仲間になるかならないかはあなたの自由だからね」

自由、か。

「……何か悪いな、気を遣わせたようで」

「良いの良いの。メロンパンの御礼って事で」

あれだな、どうやら敵対するわけでもないみたいだ。

桐条美鶴の方もあの実験の尻拭いをしているといった雰囲気だったし。

シャドウを撃破するという目的も同じだ。

そして何より、あの桐条に恩を売れるとあらば、手伝っても良い

かもしれない。おもに報酬目的で。

銃弾を入手するのも一苦労だしな。あの銃は対シャドウ用に作られた特製だから。

「まあなんだ、よっぽど切羽詰まってんなら手伝ってやらん事も無いぞ。

どうせ影時間の時はもっぱらシャドウとやり合ってるから」

「はあ!？」

何に対しての驚きなのだろう。手伝う事なのか毎晩シャドウとバトッてる事に対する物なのか。

まあどっちでもいいか。そんな訳で昼休みの時と同様に俺は再び軽く手を振りながら屋上を後にするのだった。

・・・

影時間が始まる。

機械は止まり、辺りは暗闇に染まり、そこを照らすのは不気味に光を宿した月だけだった。

昨日は街中でシャドウがわらわら居たからそのまま戦闘に突入したが今日の目的はシャドウだけではない。

「今日はタルタロス行っとくかなー、お金も減ってきたし」

俺の主な収入源。それはタルタロスである。

一応奨学金も貰ってはいるものの成績を保つ事を条件にしている為無暗に手をつけたくないと言う事で貯めている。まあまだ一月目なんだけど。

兎にも角にもタルタロスでネコババ生活をしなければ今日の食い

ぶちすら怪しいと言うのはどういうわけだろうか。

十中八九銃弾を造るのにかかる費用だな……。

いや、シャドウが落とす材料を色々いじくって造るから材料費はかかんないんだけど……。

「まあたタカヤ達に弾薬を頼まねばなるまいか……あいつらマジボツタくるからなー」

ストレガと言う組織と言うか一味……と言うか人工ペルソナ使いとしての元モルモット仲間達が俺の弾薬を造ってくれてる。対価として結構な金を持っていきやがるが。

「何度も言ってるでしょう、私達の仲間になれば武装は無料で進呈しますと」

「うおお!？」

俺がぶつぶつ愚痴りながらタルタロスへ向かいながら歩いていると、話題の中心であるストレガのリーダーであるタカヤが声をかけてきた。ストレガの残り二人……ジンとチドリもタカヤの後ろに着いてきている。

半裸の白髪ロン毛と言う、濃すぎる外見も相まって夜の光に照らされるタカヤは一段とホラーだ。マジでビビった。

「……何か失礼な事を考えましたか？」

「おうよ、半裸でうろつくな職質されんぞってよ」

「またまた御冗談を……ここは警察などが介入できる空間ではあり

ません」

「てめーの私生活での服装を鑑みてから物を言いな」

「くくく……それもそうですね」

とまあこんな具合に同じ釜の飯（流動食）を共にし、苦楽を共にし、命を賭けて桐条から逃げたと言う事も相まってそれなりに仲良くやってはいる。

何か別に俺はシャドウを殲滅したいだけなので、タカヤ達とは目的が違う為何となくストレガの一味には入っていない。それでも金さえ払えば弾丸を造ってくれるあたりありがたい限りだ。

「それで何や童児はタルタロスにでも行くんかいな」

「おう、昨日行くつもりだったんだがちょっとしたアクシデントがあつてな」

「……アクシデント？」

するとタカヤの背後に控えていたジンも口を開くのでそれに答えたところ、続いてチドリが疑問の表情を浮かべた。

「おう、俺ら以外にもペルソナ使いが居るみたいでな。それも天然っぽい」

「「！」「ほう……それは面白い」

ジンとチドリは少し驚いた様子だったが、タカヤは楽しそうにしている。

まあ確かにこいつらとあいつらはいずれ激突する気がするなー。
多分目的が正反対だもん。

それをいち早く察したのだろう、タカヤはまだ見ぬ敵に武者震い
をしたと言ったところか。

やっぱただ淡々と目的に近付くよりも障害があった方が楽しいも
んな、刺激あってこそその人生だ。

「別にそいつらの肩入れする気はねーが、あいつらはお前らと違っ
てシャドウを倒したいらしいから、気が向いたらあいつらの手伝い
するけど構わねえか？」

ストレガの一味ではないが、親密度で言えばあいつらよりもこい
つらの方に思い入れがある。

それ故に今こいつらとあいつらが敵対するならまごうこと無くこ
いつ等の味方をするつもりだ。

とはいえ現在それが現実になっているわけではないから、こうし
てあいつらに肩入れする事の許可を求めている。

何の相談もなしにあいつらのとこに行くのも何か薄情な感じがす
るな。

「ふむ……私は別に引きとめはしませんよ。ただその天然のペルソ
ナ使い達に関する情報を少々頂けるのならば」

「わしもかまへんで。別にそいつらの肩入れするからっちゅーて竜
児と敵対するわけでもあらへんし」

「……どうでもいい」

どうでもいいて。どうでもいいて……。
まあタカヤとジンの同意を得られたのなら問題はあるまい。

「つつても必ずしもあいつらと行動を共にする事になるとは限らねえからな？」

あいつらがもっかい接触してこない限りは」

「ええ。正直そこまで期待してないので問題ありませんよ」

ぐぬぬ……。

「……お前らって、何気に俺の扱い酷いよな」

「せやかて大抵の事（物理的な意味で）は平気やないかい。どんな身体しとんねん」

「私はこれでもあなたの不屈っぷりを買っているんですよ」

「どうでもいい」

ぎぎぎぎ……。

チドリここにきてからどうでもいいしか言ってるねえ……。

「……何か釈然としないがまあいい。多分今回の戦闘で弾薬使いきる心算だから次の分用意しといてくれ。

報酬と一緒に更に次の分の材料は持ってくるから」

「分かりました、用意しておきましょう。それではお氣をつけて」

「おう、じゃあの」

「気をつけてやー」 「……じゃあね」

俺達は簡単な挨拶だけすると、互いに別の方向目指して歩き始めるのだった。

存外に良い人だった（後書き）

P3はプレイ済みだしなんとかなる気がする

休むと勝手に面倒を押しつける風潮止めてくれない？

タルタロスの内部構造は日々変わりつつある。

どこまで階層が続いているのか見えないほどに高いそれは、俺の探究心を酷く揺さぶるもので桐条グループから離れた後すぐに上へ上へと目指して行ったものだった。

「今日も行き止まりつと……」

しかし、16階で行き止まりになっているのだ。

上の階へ上るのをさえぎっている柵を破壊しようとするものの、びくともしない。

何か条件があるのかと思ひ色々調べては見たものの、やっぱり何もわからないまま今日と言う日を迎えている。

……10年間、上に行けないってのは絶対おかしいよな。もうさ、いい加減同じような奴ら相手にするの飽きるっての。

「……明らかに100階は越えてるよな……」

俺は一旦下の階を目指しながら歩みを続ける。

タルタロス——すなわち「奈落」と研究者達は名付けたと言うのに天元突破しそうな高さを誇っていると言うのは如何なものか。

……だがまあぶっちゃけこの塔の名前なんぞどうでもよくって……！

「お出ましたな、クソ野郎」

今日も今日とてシャドウ狩りに精を出す事にする俺である。弾薬を使い切る、と言う事で懷から2丁の拳銃を取り出した。

いや、別に無駄遣いするわけではないからな。2、3発につき1、2体は撃破するからな。

ところで、俺は何となくだがそのうちこの柵が取り除かれる気がしている。

と言っても昨日今日で一気に情勢が変わったので、ついでに柵も消えるんじゃないかなっていうものっそいアバウトな願望に過ぎないのだが。

しかしもし仮にその願いが成就したとすると、上の階に行けばより強敵が現れる事になるはずでまだ見ぬ強敵達に対して『あれ』も使う事になるだろう。

『あれ』に見合う口径の弾薬が無い為今は使用不可だが、次にタカヤから貰う予定の弾薬に『あれ』用の物も造ってもらおう予定である。

「ハッハア！！！」

正面に見える二体を打ち抜き、背後からの攻撃を前転して回避するとともに背後に向けて数発放った。

そして起き上がる勢いそのままに先程弾丸をぶち込んでやった二体に回し蹴りを放つ事で隙を無理矢理作り出してやる。

足に気持ち悪い感触を受けながらもそのまま体を1回転させシャドウを蹴り飛ばした。

「雑魚はおねんねしてろ、いい子は寝る時間だっつーの！！」

蹴り飛ばした方向にもシャドウ達は群がっていたので背中の大剣を右手に持ち一閃。

言葉に言い表せないような変な色をした体液が辺りに飛び散る。

続いて1、2、3、4、5と周辺に居るシャドウ達を斬り裂きながらも空いた左手で銃撃。

俺は独楽のように回りながら一体また一体とシャドウを仕留めていく。

そうして周囲に居たシャドウ達の数も残りわずかになったところで新たなシャドウが現れた。

「またお前か畜生め」

名も知らぬシャドウ。巨大な体躯に両腕がスピアみたいな感じの奴。

こいつは一切の物理攻撃を通さないらしく最初接近戦で戦おうとして酷い目にあった相手だ。

そのシャドウはあいさつ代わりにと言わんばかりに身体を回転させスピアによる一撃を俺に叩きこまんとする。

「ハ！！物理攻撃が聞かなくても防御は出来るってんだ！！」

対して俺は跳躍。後に回転するスピアの間を剣を叩きこみ無理矢理その動きを停止させた。

銃も剣も効かないならやる事は一つしかない。

「ペルソナ……！！」

死と言う最上の恐怖を受け入れ、自分の中に存在する何もかもを受け入れる。

そうする事で心の仮面はそれを引き鉄に、力と言う弾丸をシャド

ウに放つ事が出来る。

そして俺の背後に表れた俺のベルソナの中身。

「一発で沈めんど、ケツアルコアトル！……ガルーラ！！」

背後に居る翼竜は咆哮を一つ放つと共にシャドウに対して暴風をぶつける。

めちやくちやに吹き荒れるそれは、一瞬にして一区画を飲み込みその場に居たシャドウをまとめて消滅させた。

そして残ったのは静寂。

「……なんつか、もう同じ奴ら相手にすんの飽きたわ」

上の階に行けるようになれと割と切実に祈る俺だった。

・・・

さて、俺の今現在の身分は学生である。

故に毎晩シャドウと戦っているとしても翌朝には何食わぬ顔をして学校に行かねばならない。

流石に大けがとか病気で言うなら休んでも良いのだろうが、病気はともかく大けがをした理由を問われると面倒になるので月光館学園に入学することになった後からは細心の注意を払ってタルタロスに挑んできた。

兎にも角にも、奨学生として学校には真面目に行かねばなるまいて。

例えばそれが寝坊して昼過ぎになってしまっていたとしても。

俺は寝坊して昼過ぎに悠々と重役出勤し、ボケーっとしながら放課後を迎えたのだが、何やら担任の教師に職員室に呼ばれたと思っただら。

「……センサー、休みの人を委員会に据えるのはどうかと思うんですが一」

「俺はちゃんと言ったぞ？委員会なりたくない奴は正直に手を挙げろと」

「それはあれか？手を挙げてない奴が委員会になるって事か？」

奴の名は吉岡。俺がこの月光館学園に入学するにあたって後見人となってもらっている男だ。影時間の適性は無いが、その存在は知っているのも俺の武器所持も黙認してもらっている。

そういう意味では感謝はしているものの、それとこれと話が違っていて事で俺は目を見開き目の前の教師を睨みつけた。

しかし俺の睨みを全く気にした様子も無く教師は笑って俺の問いを肯定する。

「exactly、その通りでございます」

俺の意志は無視かふざけやがって。いや、寝坊したのは悪いと思ってるよ？でもさ、委員会決めなんて放課後でもいいじゃない？なんで朝なんだよ？早急に決めないといけなかったの？そんな話昨日はなかったじゃん？

「ふざけないでください。苦学生の特学生は勉強に集中しないと成

績を保てないんです、だからイヤです」

「学校は勉強するだけの場じゃねえ……良いか里峰？
学校ってのは一種の箱庭なんだよ。まあ、言うなれば社会の縮図だ。」

そこで友人を作ったり部活したり委員会に入ったりってのは社会に入る為の予行演習みたいなもなんだよ。
つまり、勉強しかできないってんじゃこれからの生活困る事になんぞ？」

「だったら他の奴らにも何かさせろよ!!」

「うるせえ!寝坊した奴が悪いんだよ!!」

「言うに事欠いてそれか!ふざけんな吉岡アア!!」

「吉岡『先生』だ!」

「ふざけんなよ、Mr. 吉岡アア!!」

「かたくなに呼び捨てにしたいのな!!良いぜ、表でろ里峰エエ!!」

吹いたなクソ野郎、意地でも委員会を撤回させてやる。もしくは再選挙にしてやる。

指をバキボキと鳴らしながら臨戦態勢に入る俺。
対するティーチャー・吉岡も威圧を放ちいつでも戦える状態に入る。

しかし、俺達の対峙はあっけなく終わりを迎えた。

「こら、ここが何処だか分かってるの？」

「は！こ、これは鳥海先生！！恥ずかしいところをお見せしたよう
で……」

どうやら同僚の先生らしい。吉岡先生（一応先生をつける）のリアクションを見る限りでは鳥海先生に惚れているな？

「誰だお前はアア！！」

だが敢えて空気を読まずに声を荒げる。

「職員室にいるんだから高確率で教師に決まってるでしょうが……」

「じゃあ俺は低確率に賭けるぜ！！」

「馬鹿野郎この人はまごうこと無く教師だ！！謝れ！鳥海先生に謝れ！！」

おいおい、鳥海先生があきれた目で吉岡先生の事を見てるぞ。

わっはっはざまあ見ろ！ニヤニヤしていたら俺も鳥海先生にどつかれた。

「ハア……兎に角、ここは職員室なの。静かにして頂戴」

「は、はい……すみません鳥海先生」

「カハハ、尻に敷かれてやんの」

「おめーも謝るんだよ、委員会にぶち込むぞコラ」

謝れば委員会回避出来るのか？出来るんだな？よーしそれなら謝ってやろうか。

綺麗なお辞儀と共に謝罪の言葉を職員室に向けて放つ。

「……騒がしくしてすみませんでした」

「分かれば良いのよ、分かれば。こっちだって書類片してるんだから」

「よし、それじゃあお前図書委員な。明日委員会あるから放課後に図書室行って来い」

「えっ」

ふざけんな。

「どっちにしろ誰かがしなきゃなんねーんだよ、おめーがやれ。今度海牛で牛丼おごってやるから」

ふざけんな！

だけどもあ……海牛に釣られてやるか……。

「……ハア、分かった。

どうせ部活もしてねえし毎日毎日放課後に拘束される訳じゃねえんだろ？」

「そうだな、毎日は無いだろうけどその辺は明日確認してきな」

「はいよー」

職員室ってのは昔から苦手だ。

生徒と言う立場で職員室に入ると言うのはどうにも場違い感が否めないんだよな。

そんな訳でそそくさと立ち去る。

図書委員……めんどくさいけど引き受けてしまったモノは仕方ない……。

俺は重たい足取りで購買に足を運ぶのだった。

・・・

翌日の放課後。

図書室に行く生徒たちが集まっている。

中には白衣を着た先生らしき人物も居てパツと見そこが委員会の集まりっぽいのでその近くによってみたところ、どうやら正しかったらしい。

と言うか面子は俺が来た時点で全員集まったらしく、先生はようやく話を始められると言った表情で口を開いた。

「よし、全員集まったようだなー。今日からお前達で図書委員を務めてもらう。」

私は大西だ、担当の科目は化学なのでそっちでも分からない事があれば聞きに來い。

それじゃ、それぞれ自己紹介を……とりあえず最後に來たお前から。立って自己紹介な。

ここは図書館だからなるべく静かに」

俺か。

言われた通り素直に立ち上がり自己紹介を始める。

「1－Aの里峰です。推理物とか結構好きなんでオススメ有ったら紹介してほしいです。今後ともヨロシク」

全員に聞こえるように、かつなるべく静かにと言う条件を満たしつつの自己紹介。

こういうのは第一印象が大事だからな、変に目をつけられるのもあれなので影をなるべく薄くする事にしよう。

って考えで行った自己紹介だったが無難な感じにまとめたので反応も普通。上出来。

「里峰だな。それじゃ次お前」

……なんやかんやで簡単な自己紹介も最後一人。

大西先生の言葉を受けゆったりと立ち上がったのは何やら大人びた感じの女性。

「えと……長谷川沙織です……至らない点もありますが、よろしく願います」

普通の自己紹介だ。

だと言うのに何かあれだな。他の委員の奴らがひそひそと会話を交わしている。

俺の時は別に何も無かったのに。なんだなんだ？

「よし、自己紹介も終わったな。

それじゃ続いて月曜から金曜までの担当を決めるからな。

でも面倒だから適当に振り分けるけど良いか？」

「センサー、私はエリと一緒にが良いんですけどー」

「あ、私も友達と一緒にしてほしいんですが……」

する生徒達の何人かが友達同士で一緒にになりたいらしくその辺の融通は利かないのかと口を開いた。

確かに友達同士で図書委員になったのに違う曜日に振り分けられたらあれだもんな。

まあ別に俺は友達居ないから知ったこっちゃないけど。

「じゃ、誰かと一緒にになりたい奴が先に決めろ。ちなみに担当は一人につき週二回だからな。」

それで、残った奴は適当に振り分けるが文句は無いか？」

俺は別にないです。

無言で一回頷く。他の面子も特に何もないように異論を唱える者は居なかった。

そうして次々と担当の曜日が決められていく。

「……じゃ、長谷川と里峰。お前らは火曜と木曜な」

「「はい」」

火曜と木曜か。いやしかし毎日じゃなくてよかったわ。

流石に毎日委員会に顔を出すほど暇じゃない。

いや、実際は暇だけどもんどくさい。

「よろしくね、里峰君」

するとなんだ、長谷川さんが微笑みながら俺に声をかけた。
声をかけられた俺は素直にそれに対する返答をする事にする。

「こっちこそよろしく。長谷川さん」

物腰柔らかな人だ。

昨今の女子高生にはこうした大和撫子的なあれが足りない気がする。
る。

しかしあれだな、この学校の女子はレベル高いなオイ。

でも肉体年齢が15歳でも精神年齢は既に三十路を越えて四十路
に近付いてるからね。

精神の方が枯れてくると自然と肉体も枯れてくると言うか……。

まあそんな事はどうでもいい。

……つーか四十路にもなって銃とか剣を振り回してハイになって
いるって考えると黒歴史街道まっしぐらだな。

いやいや！前世の精神年齢はノーカンだ、ノーカン！ノーカン！

俺が頭の中で葛藤を繰り返しているうちに大西先生は最初の委員
会の集まりですべき最低限の事を終えたようで、俺達を解散させる
べく小さく声を上げた。

「それじゃ、今日の所は解散。今日は金曜だから金曜担当の奴だけ
残れ。」

図書委員の仕事について実践しながら教えるから。月曜担当の奴
は来週の放課後またここに来い、良いな？」

「「はい」」

「よし、それじゃあ解散。お疲れさん」

大西先生の言葉と共に生徒達が図書館の出口に向かって歩き出した。

俺はどうしようか、とりあえず何か面白い小説でもないか探そうかな。

適当に本棚に向かい、面白そうなタイトルの本を適当に探す事にする。

「あれ、里峰君は帰らないの？」

すると長谷川さんがいつまでも帰ろうとせずに本棚をいじくっている俺に対して疑問を抱いたらしい。それはお互い様な気がするがまあいい。

「いやさ、何か面白い小説でもないかなと思ってな。それに図書委員の仕事を実践しながら教えるつってたし」

「なるほどね。里峰君って真面目なんだ」

「俺から真面目を取ったら骨しか残らない程真面目だよ、こう見えて」

「ぷふっ。何それ……あ、そうだ。私のお勧めで良かったら紹介しようか？」

この人も本が好きらしい。

かくいう俺も本は好きだったから保健委員か図書委員なら図書委

員って事で選んだんだけど。

とはいえ本が好きだからと言って図書委員をしたいわけではない。

それはともかくどうせ図書委員の仕事も常に忙しいってわけじゃないだろうから合間を縫って本でも読もうかと考えている。

それ故に長谷川さんの申し出は非常にありがたい。

「そりゃありがてえ。ジャンルは？」

「里峰君の好きな推理物。こう見えて私も結構本読んでるんだ」

「ほう。それは期待できそうだ」

長谷川さんが少し自信ありげな表情を浮かべるのでそれに釣られて俺も楽しそうににやりと笑う。

すると、長谷川さんは少し申し訳なさそうな表情に切り替わった。

「えっと、読んだことあったらごめんね」

「それはそれで色々とな話題が出来そうでありがたいもんじゃないよ」

どっちにしろ本を紹介してくれると言う行為そのものがありがたいんだよワトソン君。

「ふふ、それもそうね。それじゃあ期待に応える為にも何作か紹介しようかな、ホームズ先生？」

長谷川さんの意外なノリの良さに小さく笑いながら、先導する長谷川さんの背中を追う事にする俺なのだった。

休むと勝手に面倒を押しつける風潮止めてくれない？（後書き）

次々と女キャラが出てきてはいますがハーレム等は一切ありませんのであしからず

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0597z/>

転生したと思ったらペルソナ

2011年12月3日17時54分発行